

高橋 禎彦 展



高橋禎彦さん(右)とカメラマンの斉城卓さん(左)。



1997年6月20日(金)～6月26日(木)
彩陶庵本館ギャラリー



1960年代はじめにアメリカで起こったスタジオグラスムーブメント(工場設

備による大量生産ではない個人作家によるアトリエでの個人的な制作活動)は、美術、工芸におけるガラスの素材としての表現の位置づけを大きく変貌させた。この動きは、次第にヨーロッパ、アジア、オーストラリア、などにも影響を及ぼし、1960年代後半には日本にもその動きが起こり始めた。

1975年に日本で初めて多摩美術大学にガラス科が設立され、高橋さんはこの創設のころからガラスに関わってきた。1978年京都で行われた「世界クラフト会議」で海外のガラスの作家たちによるデモンストレーションやスライドレクチャーを見て、「自分で自分の道を作っていく」表現方法があることを知り、強く影響を受けた。1980年に多摩美術大学を卒業すると、4年間ドイツに留学。帰国した翌年の1985年に現在の津久井湖の近くにアトリエを建て独立。

「プーッ」「プーッ・ニョロッ」「プーッ・ニョロッ・シュッ」これは高橋さんが作品を造るときのアクションだそうだ。「プー」はガラスを吹く時の、「ニョロッ」「シュッ」は装飾物を付けるアクションだそうだ。このアクションが高橋さんと素材との関係を明確に物語っている。

「僕はガラスをいじっている間に不思議な感じのものが見つかっていく。」素材との関わりの中から高橋禎彦固有の造形が生まれる。モチーフを特定するのではなく、あくまでもガラスの素材性の中から余分なものをひとつひとつはぎ取りながらかたちが生まれていくのだ。素材に寄り掛かるのではなく、また否定するのでもなく、形が非常にシンプルに感じるのは高橋さんと素材との関係に無理がないからだろう。

アートピース(オブジェなど)を造るときもプロダクション(うつわなど)を造るときも素材との関わり方に違いはなく、まったく同じベクトルで以て自分と素材(ガラス)との間で生まれる様々な可能性を追求している。「うつわを造るのは、もの(かたち)を造ることを考えるひとつの手段だから。」すべての制作が高橋禎彦のかたちの追求の課程であるため、私たちはうつわを見てもオブジェを見ても等しい感動が得られるのだ。